

# 知的障害教育における対話的な学びの探求（1）

—授業作りのPDCAサイクルの検討—

小出 博史・岡澤 慎一・齋藤 大地

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第9号 別刷

2022年8月31日



# 知的障害教育における対話的な学びの探求 (1)<sup>†</sup>

## —授業作りのPDCAサイクルの検討—

小出 博史\*・岡澤 慎一\*\*・齋藤 大地\*\*\*

宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校(現所属：栃木県立那須特別支援学校)\*

宇都宮大学大学院教育学研究科\*\*

宇都宮大学共同教育学部\*\*\*

本研究では、知的障害特別支援学校における対話的な学びの実践に向けた、授業作りのPDCAサイクルを検討した。子どもが自らの思いや願いをもち、発信していくことが対話的な学びの前提にあることから、子どもの内面を推察しながら次の構想を考える、評価〈C〉—改善〈A〉—計画〈P〉の一連の流れを作り、授業実践〈D〉につなげた。また、授業研究会では、子どもの学びの事実を丁寧に見取り、教師の同僚性を活かして得た多様な気付きを、次の授業の構想へとつなげることの重要性を指摘した。

キーワード：対話的な学び、PDCAサイクル、授業研究会、知的障害特別支援学校

### I はじめに

宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校では、「対話性を重視した学びに基づく教育実践の創造」を研究テーマに掲げ、三年研究に取り組んだ。複雑な状況のなかで生きるために必要な力を「自ら考え、判断して行動を調整できる力」と捉え、一人一人が内面をより豊かにして学びに向かうために、「対話」に注目した。

「知的障害教育における対話的な学びとは何か」

を出発点として、対話について考え、本校における授業改善の視点として「対話性」を定義するに至った。これは、対話そのものは難しいことが予想される児童生徒の実態を考慮し、対話の要素を踏まえつつ、対話につながる学びの在り方を模索した結果であった。対話につながる四つの要件(「相互主体的」、「表現する」、「受け止める」、「(柔軟に)考える」)と発達段階を踏まえて、対話性を「相互主体的に、自分の考えを表現したり、他者の考えを受け止めたりするなかで、新たな認識を柔軟につくり出す態度や性質」と定義した。

一年次の研究では、各学部の児童生徒の実態を基に、学部研究テーマを設定した。対話性の要件から、小学部は「表現する」、中学部は「受け止める」、高等部は「(柔軟に)考える」に焦点を当てた。そして、その方策となる授業作りのポイントを設定し実践を重ねた。成果としては、「分かる状況作り」、「違いを活かせる状況作り」、「試行錯誤ができる状況作り」、「多様な表現の尊重」が大切であることが分かった。一方で、児童生徒の学ぶ姿、特に内面の見取りを踏まえた評価の在り方が課題であった。

そこで、二年次の研究では、客観的な事実と合わせて、子どもの内面を描いていくエピソード記録を基にした事例検討会を行った。子どもとの様々なや

† Hiroshi KOIDE\*, Shinichi OKAZAWA\*\* and Daichi SAITOU\*\*\*: Exploring Dialogical Learning in Education for children with Intellectual Disability (1): Examining the PDCA cycle for creating lesson  
Keywords: Dialogical learning, PDCA cycle, Creating lesson, School for children with intellectual disability

\* Special Needs Education School Attached to the Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

\*\* Graduate school of Education, Utsunomiya University

\*\*\* Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University  
(連絡先: okazawa@cc.utsunomiya-u.ac.jp)  
(連絡先: daichis@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

り取りを重ねていく過程を大切に、子どもの事実から実践を構想していく姿勢を大切に。事例検討会では、複雑な文脈のなかで学び続ける一人一人の姿について話し合いと省察を重ねることで、一つの事実に対する解釈の違いが生まれ、それが様々な気づきにつながった。今後も、表出の異なる子どもたち一人一人の思いや考えを受け止め、子どもの学ぶ姿を中心に据えて授業改善を図り続けることが必要であると指摘した。

これまでの研究を踏まえ、今年度は「知的障害教育における対話的な学び」を実践していくためのPDCAサイクルの在り方を検討する。計画（P）で必要となる授業作りのポイントを整理するとともに、子どもの学びを中心に据えたPDCAサイクルの在り方を提案し、その成果と課題を明らかにしていく。

## II 目的

「知的障害教育における対話的な学び」について、授業作りのポイントを整理するとともに、実践を通してPDCAサイクルの在り方を検討する。

## III 方法

一人一人の学ぶ姿に焦点を当てた授業作りのPDCAサイクルを検討し、実践を積み重ねる。また、

二年次までに作成した指導略案（小学部11授業、中学部10授業、高等部10授業）に記載した手立てと、授業研究会での意見等をカード化し、「知的障害教育における対話的な学び」という視点から関連する要素を整理することによって、授業作りのポイントの具体化を図る。

## IV 結果

### 1 授業作りのポイントの具体化

授業作りのポイントを具体化していくにあたり、授業実践において重視していた手立てを振り返ることで、さらに実際の、具体的な手立てが検討できると考えた。

研究で作成した指導略案に示した手立てと、授業研究会で出た意見等を参考にして、要素をカード化し、分類したり関連付けたりすることで、さらなる改善と充実につなげることができた（図1）。

その結果、各学部の授業作りのポイントの具体化としてまとめたものを、表1（小学部）、表2（中学部）、表3（高等部）に示す。

授業作りの計画（P）では、一人一人の学びの姿を踏まえながら、各学部で検討した授業作りのポイントの具体化を参考にして、授業を計画することができた。

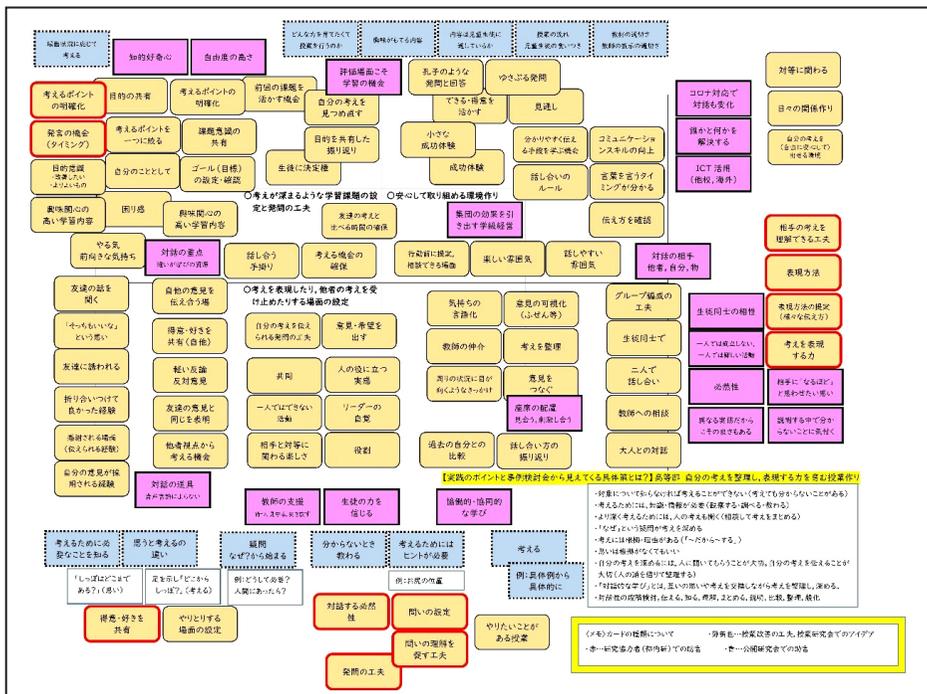


図1 カードを基にした授業作りのポイントの検討

表1 小学部の授業作りのポイントの具体化

学部研究テーマ	「やってみたい」という思いを育む授業作り ～個々の思いを活かして～
対話性の主な要件	「表現する」
授業作りのポイント1	分かりやすい環境を整える ・実態、興味関心等を把握する ・家庭と協力して、好きなこと（得意なこと）の情報を集める ・動機が生じやすい環境を整える
授業作りのポイント2	関わりは教師を基盤として、徐々に広げていけるようにする ・目的を共有して、友達と関わる場面を設定する ・関わり方の見本を示す ・教師が仲介し、子ども同士をつなぐ ・本人の行動に寄り添い言葉掛けをする ・一人一人の対話を見つめる
授業作りのポイント3	自己選択、決定できる場面を設定する ・子どもの選択、決定を尊重する ・新奇性、発展性のある活動や教材を準備する ・自由度が高い活動を設定する ・活動の文脈を踏まえて、子どもの表出を予測する ・「やってみたい」は複雑な気持ちであることを踏まえて推察する
授業作りのポイント4	他者の思いに触れる機会を設定する ・気持ちに寄り添いながら、友達との遊びにも誘ってみる ・教師が代弁する ・本人の見方とは異なる見方を伝える

表2 中学部の授業作りのポイントの具体化

学部研究テーマ	友達のを受け止め、選択・行動する力を育む授業作り
対話性の主な要件	「受け止める」
授業作りのポイント1	意欲を喚起できるような工夫をする ・楽しめる状況作りをする（思わず〇〇したくなる工夫） ・具体的な指示をする等、分かる状況作りをする ・見通しがもてるようにする ・これまでの経験、生活とのつながりを意識した内容を考える
授業作りのポイント2	自分の考えを表現する場面を設定する ・思いをくみ取り、安心して表現できる環境や雰囲気を作る ・自分から発言したり行動したりできることを保障する ・教師が仲介、代弁しながら、やり取りを重ねる ・良いモデルを示す ・「なぜ？」と問い掛ける ・考える時間を確保する ・（できないとき）別の機会を確保する ・ことは多様であるという前提に立つ
授業作りのポイント3	他者の考えを分かりやすく提示する ・物を介して、考えを伝え合う場面を設定する ・友達の良いところを探す機会を設ける ・気持ちを共有できるよう、イメージ、注意、活動、情動の共有を重ねる ・出された意見などをまとめて、整理して提示する
授業作りのポイント4	発表・確認する場面を設定する ・発表の機会を積み重ねる ・目的や意見が共有できるよう工夫する ・発表の順番を工夫する ・振り返りを大切にす

表3 高等部の授業作りのポイントの具体化

学部研究テーマ	自分の考えを整理し、表現する力を育む授業作り
対話性の主な要件	「柔軟に」考える
授業作りのポイント1	安心して取り組める環境を整える ・日々の関係作りを大切にす（互いを尊重して聴き合える関係作り） ・人数、相性、実態、目的等に応じてグループ編成を工夫する ・座席の配置を工夫する ・考えるための時間を、充分に確保する ・話し合いのルールを示す
授業作りのポイント2	考えを表現したり、他者の考えを受け止めたりの場面を設定する (表現する) ・様々な伝え方を提案・確認する ・生徒の実態に応じた表現方法を保障する ・楽しい雰囲気、話しやすい雰囲気作りを努める (受け止める) ・自他の意見を見比べるために、可視化する ・生徒の行動の意味を推察し、周りに伝える ・教師が仲介する（意見をつなぐ、代弁する、言葉を捕う、情報を整理する）
授業作りのポイント3	考えが深まるような学習課題と発問を工夫する ・学習課題を明確に、かつ焦点化して示す ・身近で、実生活とつながりのある学習課題を設定する ・前向きに取り組める目的や学習課題を設定する（興味関心・知的好奇心、自由度の高さ） ・自分事として考えられるような導入と発問を工夫する ・考えるためのヒントを示す ・考えを揺さぶる発問をする ・活動を通して考えられるように工夫する ・評価場面（振り返り等）を学習機会として大切にす

## 2 授業作りのPDCAサイクルの検討

本研究では、一人一人の学ぶ姿を大切にす、授業作りを構想している。客観的に捉えられる外見的变化のみを追うのではなく、目の前にいる子どもたちが「何を感じ取り、何を思い、何をしたのか」という内面の推察と結びつけることによって、学びの姿を豊かに捉えていくことが必要になると考えたからである。

計画〈P〉では、単元・題材の意図、子どもの学ぶ姿、授業作りのポイントの具体化等を踏まえて指導略案を立案し、実践〈D〉を行った。しかし、実践とは、様々な状況が複雑に絡み合う、具体的で個別的なものである。それ故に、授業における子どもの学ぶ姿については、内面を推察しながら丁寧に見取る必要がある。

そこで、「知的障害教育における対話的な学び」を検討するために、対象児童生徒を選定して、その学びの姿を、複数の視点から、多面的に捉えることを試みた。また、「どのように学んだのか」という事実を把握して、そのときの内面を丁寧に解釈するための授業評価表を作成した。子どもの内面については、せりふ口調で表記することで推察した。

評価〈C〉は、授業研究会で行った。はじめに、参加者全員で授業評価表に記載した情報を共有した。複数人で同時入力することができるWebブラウザを利用した文書アプリを使って、対象児童生徒の学ぶ姿について情報の共有を図った。そして、共有した情報を踏まえて、授業者が実践を振り返るとともに、授業改善に向けた問いを立てた。それを基に参加者が思い思いに意見交換をしていくという、一連の手順を設定して取り組んだ。

近年、授業研究では、リフレクション（省察）に注目が集まっている。鹿毛(2019)は、「授業で起こった事実を丁寧に確認することを土台として、実践者としての気づきを得て、自らその後の実践に活かすという働きを指す」と示した。本研究では、リフレクションの考え方を参考にした。授業者が評価されるようなかたちではなく、子ども一人一人の学びの事実と解釈を基に、次の実践に向けて活発にアイデアが出てくるような協議になることを期待した。

授業研究会で得たアイデアを活かして改善〈A〉を図り、次の授業実践について計画〈P〉していく。以上のように、一人一人の学びの姿に注目してPDCAサイクルを展開するなかで、「知的障害教育における対話的な学び」について検討していった。

### 3 実践

授業作りのPDCAサイクルを基に取り組んだ実践を、小学部5・6年、「みんなで街を作ろう」の単元を基に紹介する。

#### (1) 計画〈P〉－実践〈D〉

本単元では、児童が興味をもった建物や乗り物などの身近にあるものを、扱いやすい様々な材料や用具を使い、工夫して作品を作ることを目標とした。

様々な材料に触れ、自分なりに建物の形や色を工夫したり、街並みにある信号や車などを作ったりする等して、みんなで協力して街を作る。活動途中には、「みてみてタイム」という鑑賞の時間を設け、児童の頑張りや工夫した点を賞賛し合う。そこで得た発想を大切に、自分の作品作りをさらに豊かなものにしてほしいと願い、授業実践を重ねた。

第1回目の研究授業(2/全5時間)では、街に置く自分の家を作った。授業作りにおいては、表1にあるポイント4 他者の思いに触れる機会を設定する(本

人の見方とは異なる見方を伝える)」を中心として手立てを考えた。具体的には、様々な材料(箱、色画用紙、トイレトペーパーの芯、ペットボトル等)を用意することで、それぞれの発想が広がるように配慮したり、作った作品を見せ合うことで新たな発想につなげたりすることを考えた。しかし、実際の授業においては、例えばペットボトルをつなげた形状を見て「マラカスを作ろうかな」と発想した児童がいたり、箱やストローを組み合わせてロボットのようなものを作る児童がいたり、自分の家を作るという授業の目的から外れて活動に取り組む児童が数名見られた(図2)。

#### (2) 評価〈C〉－改善〈A〉－計画〈P〉

授業研究会では、授業評価表にある学びの姿を参考にして、授業で起こった事実を丁寧に確認した。そこで得た気付きも踏まえて、授業者はその後の実践につながる問いを立てた。本時では「街にある自分の家」というテーマを設定したものの、別のものを想起して作ろうとした児童が数名いた。そこで、

### 【授業評価表】

授業で起こっていた事実を基にして検討するための、情報となります。  
御記入をお願いいたします。

6/18 (金)	小学部3組	「自分の家を作ろう」
----------	-------	------------

#### 1 Aさんについて

	エピソード (ふるまいや発言等)	内面の推察 (子どものつぶやき)
(説明)	※目指す姿を踏まえ、心に強く残ったエピソードを、簡単に記録してください。	※子どもの思いを代弁するように台詞口調で表現する。
あ教諭	・Uさんが「ここはエイリアン」と言っていた。	「ぼくの好きな世界の絵を描いたぞ」
い教諭	・自分の家を作る場面。選んだ材料を使って、次々と自分の家を制作していた。(えんとつ?→タイヤ→足)	「これを使って、〇〇を作るぞ!」
う教諭	・「もう少しで終わりにするよ」と言われた後にさらにマジックで絵?を書いていた。	「大変。僕の家が完成しないよ。急がなくて」
え教諭	・自分の発表のときに「全部じゃだめでしょ?タイヤ・絵・足を頑張りました」	「『全部』の中身はこうゆうことかな」
お教諭	・これはタイヤで、これは足と先生や友達に説明している。	「こっちは、タイヤだけこっちは、タイヤじゃなく足になっているんだよ」
か教諭	(ボンドでくっつけているとき)	(大事にしたい) 「こわれないように、そーと」

図2 対象児童に関する授業評価表

「(目的意識を共有した上で) 友達への関心をもちながら、制作する意欲を高めるためにはどのような手立てが必要か」という問いを立てた。

教師9名で協議し、いろいろな意見が出た。「街の土台を大きく示すことで、街を作るという目的を共有する」、「教師がそれぞれの児童の良いところをみんなに聞こえるように褒める」等といった意見が挙がった(図3)。



図3 授業検討会の様子

子どもの学びの姿と授業研究会で得た気づきを基に授業改善を検討し、第2回目の研究授業(4/全5時間)を行った。本時は「みんなで街を作ろう」とし、街にあるもの(店、車、信号等)を作る時間として設定した。前回の授業研究会を踏まえて、授業作りのポイントについては、「ポイント2 関わりは教師を基盤として、徐々に広げていけるようにする(目的を共有して、友達と関わる場面を設定する)」を中心に、授業の方向性を検討した。導入においては、大きな街の土台を広げ、自分が作った家を置く活動を入れた(図4)。また、友達の作品から発想を得るために取り入れた「みてみてタイム」では、一人一人の面白い発想を、全体に伝えるような言葉掛けをすることを意識した。



図4 授業で取り入れた街の土台

## V まとめと今後の課題

本研究では、リフレクションの考え方を参考にした。授業者が評価されるようなかたちではなく、子ども一人一人の学びの事実と解釈を基に、次の実践に向けて活発にアイデアが出てくるような協議になることを期待した。時間的な都合から、対象児童生徒を2名に限定したり、丁寧に学びの事実と解釈に時間をとることができなかつたりと、今後課題も残した。だが、子どもの思いを代弁するようにせりふ口調で内面を推察し、子どもの学びの事実を基にして次の授業の構想へとつなげることができたことは、成果の一つであった。

内面を見取することは難しい。それでも、子どもの思いや考えを推察し続け、複数の教師で一つの事実について解釈し合う機会は、これからも大切にしていかなければならないと考える。

## 付記

本稿は、宇都宮大学共同教育学部附属特別支援学校において共同で取り組まれたものの一部を筆者らの責任の下に発表するものである。

令和4年4月1日 受理





Exploring Dialogical Learning in Education  
for children with Intellectual Disability (1):  
Examining the PDCA cycle for creating lesson

Hiroshi KOIDE, Shinichi OKAZAWA and Daichi SAITOU